

令和 元年 6 月 20 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K00753

研究課題名(和文) 母乳哺育期待の変化と母親の授乳意識・行動に関する研究

研究課題名(英文) changing social expectations of breastfeeding, mothers' perceptions and practices of infant feeding

研究代表者

金子 省子 (KANEKO, Seiko)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：80177518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：母乳哺育期待の変化を捉えるため、戦後の母子保健施策、人工栄養品の開発・販売、医学的な見解、女性労働、保育環境などの授乳に関連すると考えられる社会的要因の変化について資料収集し考察した。そして、これまで分析対象とされなかった保育者養成テキスト、絵本の中の授乳についての言説を分析し、これら社会的要因の影響を明らかにするとともに、母親中心のジェンダーバイアスの存在があり、多様な養育環境が十分に反映されていないことを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では母子保健領域を中心とした母乳哺育支援の研究と実践の蓄積があるが、当事者の経験を中心におき、ジェンダーに敏感な視点から授乳に関する社会的要因の影響を捉えた研究は少ない。養育支援の対象であるとともに、女性身体と社会システムを捉える有効な視点ともなる行動としての授乳に着目し、戦後の授乳関連施策や生活環境の変化を捉え、授乳に関する言説分析の範囲を拡大して考察することで、授乳の社会史研究の進展にかかわる視点を提示した。

研究成果の概要(英文)：To investigate changing social expectations of breastfeeding, social factors such as mother-child health care measures, development and marketing of baby formula, medical considerations, maternal working, and child-rearing environment were analyzed. Discourses in nursery teachers training textbooks and children's picture books were also analyzed in relation to infant feeding. These discourses were influenced by those social factors and there were gender biases and absence of perspective on diverse childcare situations.

研究分野：家政・生活学一般、児童学

キーワード：授乳 母乳哺育 養育期待 社会的要因 育児言説 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

栄養法をはじめとし変化をみせる授乳について、日本では母子保健領域を中心とした母乳哺育支援の研究と実践の蓄積がある。しかし、人工・混合栄養を含む授乳についての当事者の経験を中心に、ジェンダーに敏感な視点から社会的要因の影響を捉えた研究は多いとは言えない。本研究者は、養育支援の対象であるだけでなく、女性身体と社会システムを捉える有効な視点ともなる養育行動として、授乳に着目してきた。Palmer, G. (1988)や Esterik, P.V. (1989, 2002) のような環境資源の持続を念頭に母乳哺育の重要性を指摘する研究、Jhonson, S. (2009) にみられるような母性イデオロギーといかに主体的に切り結ぶかが重要とする研究などの先駆的な研究を検討し、これまでに母乳哺育に関する社会的期待の変遷に関する研究を行い、養育者の意識・行動に関する量的・質的調査研究を行ってきた。

2. 研究の目的

本研究は日本の戦後を対象として、母乳哺育期待と養育者の意識・行動に関する研究を深化させることを目的とした。母子保健施策や人工栄養品の開発、医学分野などの専門家の見解、女性労働、乳児保育環境などの社会的背景の変化とともに、多様な媒体における言説を捉え、母乳哺育期待の変化を捉えようとした。養育者の意識・行動の変化については、母乳推進運動開始前後の授乳経験者を対象に含む既存資料の検討及び新たな調査を企画した。これらにより、戦後日本の授乳の社会史研究について、新たな視座を提示できるものと考えた。

3. 研究の方法

(1) 戦後の授乳に関する社会的要因の資料収集に基づく検討

母子保健施策、人工栄養品の開発状況、医療・保健専門家による母乳・人工栄養論、女性労働状況と職場の授乳環境および乳児保育の普及状況に関して検討した。

(2) 乳児保育の場での保育者による授乳の検討

乳児保育の普及状況をふまえ、専門家養成における授乳の位置づけに関する資料を収集し考察した。

(3) 子どもからおとなまでが触れる絵本のなかの授乳についての検討

読者が母親に限定されない絵本という媒体に描かれた授乳を分析・考察した。

(4) 母親にとっての授乳の語りについての検討

母親が授乳について語った内容が記載された 1970 年代以前の史料に基づくインタビュー内容の検討を行い、予備調査内容に反映させた。

4. 研究成果

(1) 戦後の母子保健施策の動向、人工栄養品の開発・販売状況、専門家による母乳・人工栄養論に関して検討した。また、日常の授乳・養育環境を構成する労働や保育環境の動向については、乳児保育の普及以前の託児の実際に関する記録などを収集した。

これら諸要因の変化を捉えることで、世界的な母乳推進の動きを受けた、1970 年代半ばの母乳推進施策開始だけではない他の要因における時代画期をおさえ、これに基づいて授乳に関する言説分析や母親の語りの分析に反映できる分析を行った。

(2) 保育者に焦点を当て、1960 年代以降の保育者養成における授乳についての情報の変遷を捉えた。全国社会福祉協議会刊行のテキストの記述を用い母乳哺育観を中心として分析した。

主な結果として、母乳を最良とする授乳観・母乳哺育観は、一貫していること、一方で、人工栄養と母乳栄養の記述量に大きな変化が認められること、すなわち 1960 年代・1970 年代から 1990 年代にいたる母乳栄養に関する記述の増加と、人工栄養の記述の減少を指摘した。これは、人工栄養のメインとなるものが、取り扱いがより難しい牛乳から粉乳に変わったこと、そして、1960 年代の急激な母乳栄養率低下への危機感およびその後の世界的な母乳推進の動向を受けた母乳推進施策が影響しているのではないかと考えた。ただし、1980 年代には母乳栄養の衰退を憂慮する記述の一方で、各社粉ミルクの成分比較が掲載されている。1990 年代以降の母乳についての記述の大幅な増加および内容の変化には、母子保健分野よりも遅れて母乳推進施策の反映がうかがわれた。日本の母乳推進策の本格化は 1970 年代後半であり、母子健康手帳のような親向けの情報や家庭科教科書などに比べると、タイムラグがあることがわかった。その背景には、保育所等における人工栄養品の現実的な利用があるのではないかと考えられた。

2000 年代以降、特に 2010 年代には、保育所保育指針の改訂や『授乳・離乳の支援ガイド』

の内容を反映し授乳についても保護者への支援が強調されているが、保育の場や保護者の多様な状況を反映し、保育者の専門性をより明確にした情報内容や表現がさらに必要と考えた。例えば、『子どもの食と栄養』では、保護者の栄養法に関する希望データなども紹介され、より保護者支援の視点が明確となっているものの、具体的な記述レベルでは、保護者向けと変わらない表現があることなどから、保護者と保育者という授乳にかかわる人々の連携を保育者側から描く視点を鮮明にする必要性を指摘した。

- (3) 授乳という養育行動に焦点化し、絵本に描かれた授乳像を明らかにし、さらには、これらの絵本についておとなと子どもが楽しむ児童文化財としてだけでなく、青年期の保育学習の教材という点から検討を行った。「児童書総合目録」をもとに、46冊の絵本を抽出・収集し、登場人物(動物)描写の視点および主題より分類・整理し全体的な傾向を捉え、絵本に描かれた授乳像を検討した。

その結果、多様な主題がみられ、乳児期の親子のかかわりが具体的に描かれることなどから生育史をたどる学習をはじめとし、子育て・子育てを理解する上で活用できると考えられた。しかし、諸外国の絵本にみられるような父親のミルク授乳などの姿は描かれず、他の哺乳動物同様の「自然」なこととしての母乳授乳の姿が描かれ、母親の子どもへの思い、子どもの母親への思いなど母子を中心に描かれていた。また、母親と共に描かれた子どもの多くが男児で、女兒は将来の母親という描かれ方であるなど性別による相違がみられた。また、母乳以外の栄養法の親子への配慮や著者からのメッセージが一部にみられるものの、ほとんどが父親不在の描き方であるなどから、保育学習教材として活用する上では、ジェンダーに敏感な視点や多様な養育環境を視野に入れた位置づけが必要であることを指摘した。

- (4) 2010年代については、自身の研究のなかで、半構造化インタビュー調査をもとに多様な栄養法と経験をもつ女性の経験を「母乳哺育についての母親の意識の変容過程」として明らかにしている(金子、2013)。本研究では1970年代後半以降の母乳推進期の授乳経験者の回顧的インタビュー実施の内容を検討するため、1910年代から1960年代まで見られる乳児の審査会における母親の語りを手がかりにインタビュー内容の整理を行い、母子に対する評価と母親の母乳哺育への評価、数値化された優劣に関する当事者の受け止めなどについての視点を捉え、インタビュー内容に反映させることとした。

以上のように、母子保健施策や人工栄養品の開発・販売状況、女性労働と乳児保育環境などの社会的要因の変化とともに、保育者や幅広い年齢層が触れる多様な媒体における授乳関連の言説にみられる母親への授乳および養育期待を捉えることができた。このような媒体においても、養育者としての期待にジェンダーバイアスにかかわる問題があること、普及する乳児保育と冷凍母乳の活用などの変化し続ける保育環境の下で、保育者の授乳者としての役割を具体化、明確化することの必要性を指摘した。そして、社会的要因のもつ時代画期を整理・考察できたことで、授乳に関する多様な媒体の言説分析だけでなく、今後の母親の語りの分析に反映できる視点が得られた。

<引用文献>

金子省子、母乳哺育に関する母親の意識の変容過程に関する研究、乳幼児教育学研究、21号、2012、19-27

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

金子省子、養育行動を描いた絵本について 家庭科保育学習教材としての検討、愛媛大学教育学部紀要、査読無、64巻、2017、47-55

金子省子、保育者養成テキストにみる母乳哺育観、児童学研究、査読無、41号、2017、25-31

〔学会発表〕(計1件)

金子省子、絵本に描かれた授乳について、日本家政学会、2017.5.28、奈良女子大学(奈良県)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況（計0件）

6．研究組織

（1）研究分担者

（2）研究協力者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。